

# 問われる道の環境行政

## 「汚染源の特定」を放置して どう道民の生活を守るのか



安平川に架かる源武橋(写真)で採取された河川水からは、暫定目標値の2倍近い濃度のPFASを検出。静かな農村地帯が広がり、近くには産業廃棄物の処分場などがある

今年7月、先端半導体工場「ラビダス」に供給する工業用水をめぐって北海道が実施した水質調査で、安平川に架かる源武橋から採取した河川水から国の暫定目標値を大きく上回るPFAS(有機フッ素化合物の総称)が検出された。それまで低かった数値は、この橋で大きく上がる。汚染源はどこか探ってみると、ひとつの産業廃棄物処分場の存在に突き当たる。「ラビダス」でも半導体の製造工程で規制対象外のPFASは使われる予定だ。浮上したこの問題の深層を探ってみた。

ラビダス関連のPFAS調査で河川水から目標値の2倍を検出

胆振管内安平町と空知管内由仁町の境界が源流になっている安平川は、農村地帯や勇払原野などを貫流し、苫小牧市内で太平洋へ注ぐ延長

50キロほどの2級河川である。今年7月、道が実施した先端半導体企業「ラビダス」に供給する工業用水をめぐる調査の中で、安平川に架かる源武橋から採取した水から、飲用水の暫定目標値の2倍近い95ナノグラム／リットルのPFASが検出された。

そのほとんどは毒性が強く、2021年からは製造・輸入が原則禁止されているPF<sub>6</sub>O<sub>4</sub>と呼ばれる物質。調査結果に対し、道民の間にも衝撃が走った。

筆者は10月下旬、人口7千余りの安平町の南部に位置する源武橋に向け、車を走らせた。晩秋の田園地帯を流れる安平川は濁り、清流とはほど遠い。北には早来地区の市街地が広がり、近くにはゴルフ場や乳牛の共進会場もある。高低差の少ない道道を通り、厚真町内を経由して苦東の一角にある工業用水の取水施設にも行ってみた。

巨大半導体企業「ラビダス」は、新千歳空港に近接する工業団地「千歳美々ワールド」の敷地内に建設される。本来は太平洋に注ぐ安平川の水を苦東地区でくみ上げ、22キロにおよぶ配水管を使って半導体工場に送る。配水工事の事業費は2百億円程度(元成予定は27年度の第1四半期)。ラビダスの排水は、千歳市の公共下水処理場を経て、千歳川に放流する計画になっている。



新千歳空港にほど近い「美々ワールド」の一角で急ピッチで進む「ラビダス」の建設現場

は、その無謀さゆえに反対世論が高まり、中止になった。25年前のことである。しかし今、巨大な半導体工場が使う水を流域外の千歳川に排出する——よく似た構図ではないか。多くの道民には、工場用水の使用量や水質の変化など詳細は知らされていない。

発生源めぐり関係者は口を濁し 法制度の不備など指摘する声も

前出の道が実施した安平川でのPFAS調査は、ラビダス進出にともなう漁業への影響を懸念する水産団体や、同社の意向などを踏まえたも

のだったという。

自然界では分解されず「永遠に消えない化学物質」と呼ばれるPFASは、排水とともに川や海に流れ込み、土壌中に残るとゆっくり地下水に染みだし、川や海につながり徐々に地球を汚染していく。

規制対象のPFOAやPFOSなどは、ホルモンへの影響や新生児の体重の低下傾向、免疫力の低下、発癌の可能性などを引き起こす化学物質。これまでも撥水性のある衣料品や車などのコーティング素材、台所用品、消火剤、プラスチック廃棄物半導体などの分野で幅広く使われてきた。近年、全国各地で飲用水のPFAS汚染が明らかになり、国民的な関心も高まりつつある。汚染源として、泡消火剤を使う空港や駐車場、産業廃棄物の処分場などの存在が明らかになってきた。

では、今回の安平川PFAS汚染の発生源はどこなのか。安平川を管理する道胆振総合振興局は8月初め、源武橋の上流部に位置する「製造業や水質汚濁防止法に対応する17事業所」に立ち入り、聞き取り調査を実施した。担当の道環境生活部循環型社会推進課にその結果を聞くと、



80年代半ばから産業廃棄物の搬入が始まった早来工場の入り口。取材を要請したが拒否された

「いずれの事業所も(規制対象の)PFASは使っていない」とのこと。(汚染の)原因特定は難しく、規制対象のPFOAなど3物質は水質基準値が定まっています。法的な枠組みから外れるものを調べることにするわけで、今は過渡期。その範囲内でやれることをしていきたい(菱沼貴志・水環境対策課長補佐)という答えが返った。

17事業所の中には産業廃棄物の処分場もある。筆者は「その間近で採水・分析すると汚染源がはっきりするのでは?」と問うたが、「原因が特定されたら数値の低減を要請することになりますが、現状ではPFASの環境基準がないため、

道として改善命令を出すことはできません」(同補佐)

と、道民が抱く不安感の解消にはほど遠い説明だった。

地元の安平町は、道の調査結果について連絡を受けた直後に、安平川の上流で取水している3つの浄水場の水を独自に検査した。PFASが検出された場合に備え、除去用の活性炭も手配。さらに農作物の風評被害対策として、地下水を水源とする2カ所の浄水場と畑地かんがい用水2カ所の水質検査も実施した。

同町の田中一省副町長は、「今後



旧早来町遠浅地区の自治会役員として住民運動を支えてきた大嶋一紀さん

るようになった。

当時、環対協の事務局長だった商店主の大嶋一紀さんを訪ねた。「(上流部の)農家が出すわけがないから、PFASの発生源として一番疑ってみるのが早来工場だよ。その安平川の水を使う農家がいることが一番の問題なんだ。(農作物に対する)風評被害なんかがあると困るからね。農家は仲間だし、うちは弁当屋もやっているから、そんなものを流されると影響を受けるんだ」と話し、現状を憂慮する。

環対協では以前、「構内に池を造り(汚染の有無を確かめるために)鯉を放してくれ」と要望し、会社側は受け入れたという。大嶋さんらは何度も現地確認に赴いたことがあり、悪臭問題などの対応には一定の評価をする。しかし、PFASは目に見えない汚染物質なだけに心配の種は尽きない。

### 産廃の処分事業者は取材を拒否 問われる認可した北海道の責任

安平町内では、早来工場とは別に、大栄環境グループのDINS北海道(株)が北進地区に産業廃棄物処分場の建設を計画している。

道は安平川の水質モニタリングを継続するというので要請があれば協力していきたい」と話す。汚染源の特定については、

「我々の立場として、『○○ではないか』ということとは出来ません。法律が変われば別の動きになるでしょうが。今後、生活用水に支障が出てくるようなことになれば、対策を講じたい」

と、待ちの姿勢をのぞかせた。

### 安平町内の産廃処分場が発生源か 農業への風評被害を心配する声も

明晰なはずの行政関係者が多くを語ろうとしない、発生源の可能性が高い事業所はどこなのか。

7月16日に採水した安平川水系8地点の測定結果は、道環境生活部のホームページで公開されている。上流部の追分・安平地区、そして早来・遠浅地区に至る7地点は、PFOAとPFOSの合計値で0.8、4.1ナノグラム/リットルと少ない。しかし、下流部の源武橋では95ナノグラム/リットルと、いきなり跳ね上がり、飲用水の暫定基準値をオーバーしてしまった。

関係者の間で囁かれているのは、

町は、「すでに処分場を受け入れている状況であることから、社会的責務は果たしている。迷惑施設といわれる最終処分場はこれ以上必要ない」との理由から建設に反対。しかし同社は、2015年に地元自治会への同意確認がない中で事業計画書を提出し、道は抵抗せず、これを受け理してしまった。

近隣自治会や住民グループ「あびらの自然を守る会」(会員数86人)が意見書や行政不服審査請求、学習会の開催、署名活動などを展開。処分場の設置は許可されたが、計画は進展していない。

同会代表で早来市街地の自治会長も務める山下美樹さんは、「早来工場については」町が誘致した企業で、町内には米を作る農家もいるから風評被害の問題もあります。『守る会』としてはノータッチとせざるを得ません」

と話す一方で、PFAS問題については、「飲み水は大丈夫」と言われても心配。安平の町が良くて移住した人もいます。この問題では、「一般町民は何も言わなくてもいい」という雰囲気があるけれど、(関係者は)きちんと説明してほしい」と要望し



別の産廃処分場計画に異議を唱える「あびらの自然を守る会」代表の山下美樹さん

源武橋から直線距離で3キロほど北西に位置する、産業廃棄物処理業の早来工場(小松聡明代表取締役社長)の存在だ。

同社のHPによると、1975年の創立で現在は産業廃棄物処理の三友グループの一員。道内には、安平町新栄に最終処分場、石狩市内にある札幌工場では産廃の焼却や化学処理のほか、フロンやPFOSの分解処理も手がけている旨の記述がある。安平の処分場にはこれまで、金属や電機関係の事業所、発電所や屠畜場などで発生した汚泥や燃え殻、鉍滓

などが搬入され、構内で埋め立て処分をしてきたとされる。

今から30年近くも前、本州方面からの産業廃棄物の道内搬入が社会問題化したことがあった。当時、道外からの搬入が認可されていたのは、同社とイトム力鉱業所の2カ所。筆者は、早来工場が進出した経緯や地元住民との軋轢などについて取材した(本誌95年12月号)。もう忘却の彼方になっていたが、記事を読み直すと記憶がよみがえってきた。

処分場の敷地は、80年代に旧早来町が100%出資の第3セクターが大手ゼネコンから買収し、4カ月後に同額で転売。「公社が公有地でない土地の売買の当事者になることを禁じた法律に違反した措置で、企業誘致一辺倒だった町の体質を物語る」と指摘している。

また、90年には大雨で処分場からあふれた汚水を山林に捨てた事件が発覚し、道が営業停止処分にした。この事件をきっかけに旧早来町南部の7自治会による「環境問題対策協議会(環対協)」が発足。町と早来工場、環対協による公害防止協定が締結され、会社側との協議や現地への立ち入り調査などが行なわれ

て言い分を聞こうとしたが、「取材は受けません」。「その理由は？」と聞くと「取材に応じたことになるので、お答えできません」として門前払いされてしまった。

今後の焦点は、ひとえに道の対応にかかっている。道は、安平川は環境生活部循環型社会推進課、全道各地の河川は同部環境政策課、千歳川は経済部次世代半導体戦略室で分担してPFAS調査を継続し、分析結果などをHPで発信していくという。しかし、民間業者に水質分析を依頼するだけで問題が解決に向かうほど甘くはないだろう。前出の大嶋さんは、「ラビダスにしても、町や関係の市、道がどれだけきちんと調査をしていくのか心配です。道自身も詳しいデータなどを入手しているはず。この安平川の汚染問題は、道が本腰を入れなければ駄目ですよ」と力を込めた。

PFAS汚染の原因や現状、今後の影響などを深掘りして公開し、安心できる道民生活を保証するために道の責任は重い。29年前の記事の中見出しに付けた「しつかりせい! 環境行政」を今、そのまま道の関係者に進呈しておこう。



安平川の水は「ラビダス」に供給。排水は公共下水道を経て、この閘門から千歳川に放流される

ていた。

全国の廃棄物処分場の実態に明るく、元東京都環境局職員の高原寿和さん(安平町環境アドバイザー・千葉県在住)はこう指摘する。

「処分場がPFASの汚染源という事例は、これまでも全国にある。立ち入り調査権がある道も、早来工場に絞っているはず。雨が降ると埋めた廃棄物から有害物質が流れだし、PFASが除去されない施設も少なくありません」

では、早来工場側はどう受け止めているのか。10月30日、同社を訪れ